

「内側／外側」から見る風景



金 迅野

東京外国語大学特任研究員
川崎市ふれあい館

ジャン・モアの写真を見たパレスチナの友人たちの多くは、全く前例のない形で彼は私たちを見たのだと思った。しかし同時に、私たちが自分自身をそのように見詰め直してもよかった視点から——つまり、私たちの世界を内と外から——彼は私たちを見たのだ、とも私たちは感じた。

E. W. サイド¹⁾

◆ Intro

私はいま「内側」にいるのか、それとも「外側」にいるのか。そのような想いが頭をよぎることがある。それは何の「内側」であり「外側」なのか。

歴史の記述をめぐる、時間の流れを線分とみなしその線分から離れた場所から事柄を記述する姿勢や視線を「側面図」的とし、それに対して流れる時間のただ中にとどまりつつ記述しようとするそれを「正面図」的とみなすことができるという²⁾。

1) E.W. サイド、1995、『パレスチナとは何か』岩波書店、p. 8

2) 野家啓一、2005、『物語の哲学』岩波現代文庫、p. 125-130

神奈川県国際交流協会（現かながわ国際交流財団）に勤務しているとき、2004～05年度にかけて多言語情報の流通・伝達をテーマとした「調査研究」という事業にかかわった。恐らくそのテーマの展開を見込まれて東京外国語大学の「協働実践研究」のプロジェクトに誘われたのだと思う。ところが故あって退職し、07年4月から「川崎市ふれあい館」に勤めることとなった。私は、個々が「個人商店」の主であるような職人集団のなかで、「実践」の素人として、劇的に変化するさまざまな風景のなかを生きることになった。息継ぎをするのも難しいような「現場」のなかでさまざまな模索をするうちに、スタッフと相談をした末、「新渡日」の子どもたちの学習サポートを「協働実践研究」のテーマに据えることとした。

「実践」とはいうものの、私は「実践者」を名乗れるような経験を積んでいない。一方で無論「研究者」でもない。そのような私が「正面図」として描けるものがあるのかどうか定かではないけれども、「協働実践研究」というプロジェクトに呼ばれていまに至るまでの時間の中で私が風景の「ただ中」で見た事柄、あるいは、いまはここにはない「風景」の中に入ったり出たりしながら³⁾、想い起こした事柄について少しく記してみようと思う。

I. 投瓶通信

時計の秒針が刻むような均等に割り振られたのとは違う時間の流れがある。カーニバルのような非日常的な出来事のなかにいるとき、抜き差しならない危機的な状況や出来事のただ中に身を置かざるを得ないようなとき、あるいはそのような事態に遭遇して気がつく渦中にいるようなとき。人はそのような時間の流れのなかでは、いま視界のなかに入っているのとは違う種類の風景を見たり、いままでとは違う形である種の風景を想い起こすのかもしれない。2000年の6月に父と死別した直後、私は恩師ともいべき友人に「寓話」という名の通信を送っていた。それは、ある活動をめぐって格闘と葛藤を続ける友人に向けて難破船の中から送られた「投瓶通信」のようなものであった。「投瓶通信」が誰かに受け取られたという不思議な「先取り」のような感覚にとらわれながら、「難破船」の中で、ある日訪れた団地の風景のことを想い起こしていた。

3) それをラカブラにならって“transferencial”（転移的）と言えるのかどうか知らない

D. ラカブラ、1989、『歴史と批評』平凡社、p. 93

◆ 寓話

1

あなたは、ある日、その路線バスの停留所に降り立つ。交差点を緊張しつつ直角に曲がってまっすぐに進むと、やがて団地のマーケットから発してくる東南アジアの惣菜の香りが右手の方から強烈に眼と鼻腔を撃つのを経験するだろう。この「街」のにおい。建物の在り方が示すそこに流れたある時間の長さ。「とっぼさ」が「かっこよさ」と共存している空間で、必ずしも「行儀」がよくないかもしれない人々が見せるたたずまい。そして、そのたたずまいに深く刻まれた歴史の痕跡。「この街は私のものだ!!」。平塚駅からの小旅行の末にプロジェクトの根拠地である集会室にたどりつく道のりのなかで、あなたは思わずそう叫びたくなるかもしれない。

小さな部屋でさまざまな事柄が決められていくその在り方は、この「街」がつくられて以来「集会室」と呼ばれるその部屋で、おそらくは多くのささやかな夢が報われることなどあらかじめ度外視されつつ語られたこと、または深い絶望がここに集う人々によってさりげなく分有され、あるいはされ得なかったであろうことを想像させる。この「街」の風景がこの地にたたずむ者に無言のうちに示すのは、それらすべてのモノや事柄の背後にある人々の「かかわり」の痕跡だ。その痕跡のひとつひとつが、あなたをして言わせはしないだろうか、「この街は私のものだ!!」と。

2

私が子どものころに住んでいた「街」は、東京郊外の米軍基地に隣接した公営団地だった。そこには、何人かの朝鮮人住民がいたのだが、彼らがそこにいられたのは、いくつかの朝鮮人部落から強制退去させられることの見返りに住むことを「許された」からだった（1960年代当時「外国人」は公営団地に住む権利を有していなかった）。高度経済成長とは、朝鮮人部落のような、都市のなかの異形を、アスファルトと無菌室の箱と電飾で塗りつぶす「プロジェクト」だったといえるのだとしたら、私の「故郷」はそのような「プロジェクト」（具体的には東京オリンピックというプロジェクト）によって消されてしまったのだ。

その「街」にはほかの棟よりひととき小さい2つのタイプの棟があった。ひとつは5階建てのアパートでひとつひとつの間取りが一回りずつ小さくできていた。私が小学生のころにそこに住んでいたボブという知人をはじめ、その棟の住民はみないわゆる「母子家庭」なのであった。「母子家庭」という括弧をつけられた人々が、間取りのひととき狭い空間にきれいに配置させられていたことに、義侠心の強い私の母親はそのことを自分のことのように憤慨していた。自分の子どもたらに「しょうゆご飯」を食べさせながら……。生活保護を受けざるを得ない老夫婦のいずれか一方が死去した場合に、支給される金額がきっかり半額になると同じ算術が、「最大多数の最大幸福」の名のもとにそこでも行われていたのだらうと思う。

もうひとつのタイプは、平屋のアパートで、総体的には貧乏人の居住区であるその「街」のなかでも、おそらくもっとも低い所得層の人々の住居としてあてがわれたものだったのではないかと思う。いまでも、場末の温泉街の片隅などに、そうしたたずまいが生息しているのをごらうじて眼にすることができると。トナミくんはそんなアパートの住人だった。トナミくんはうまく話せない。つねに吃音が出てしまう。たぶん20歳くらいになるはずなのに、10歳も年下の私たちと野球の勝負をしていた。手加減することを知らない彼はいつも真剣勝負をするためクレームがつくこともあったけれども、大概は「仲間」として私らと野球をした。

たまに基地の塀を乗り越えて米軍基地から「自由の国」の国籍を持つ子どもたちがこちらの「街」に乗り込んでくるのがあった。あららがこちらに来るのは「自由」だけれど、こちらがあららに行くのは「不自由」だ。そんなアンバランスな世界のなかで少年たちはいつしか石つぶてを投げ合っていた。気がつくと、ボブの額から鮮血が流れていて、トナミくんが大声で叫んでいる。トナミくんにも「自由の国」の子らの投げる石は当たっていた。「不自由の国」に生きるボブの額から流れた血が私の指先を伝って地面に落らた。彼の頭髮が縮れていること、肌が褐色であることの意味をその当時の私はまだ知らなかったが、私はあのとときの血のにおいをいまでも忘れない。それは「不自由」な「自由」のにおいだった。

いうまでもなく、日本の多くの地からこのような「風景」はすでに失われてしまった。私の「町」もいまは無菌の箱たる高層アパート群をつくる「プロジェクト」によって全面的に姿を変えさせられてしまった。そのようにして私たらは失われたあまたの「風景」の「死」を踏み台にして「いま」を生きている。そんな「いま」を生きる私たらにとって、「横内プロジェクト」に「かかわる」ということ。それは恐らく、そうした失われた「風景」との対話を取り戻すことなのではないだろうか。少なくとも私にはそう思えてならない。

「この街は私のものだ!!」。私の魂がそう叫んで以来、私は再び足を運ぶ機会を持てずにいる。そんな私は、そしてもしかしたらあなたは、これから「横内」で、幾人の「ボブ」や「トナミくん」と出会うことができるだろうか。さまざまな「旅」の末にこの異形の「街」にたどりついた彼らといま……⁴⁾。

ひとつの風景の想起が、別の、死した風景（瓦礫の風景）を想起させるということ。「想起」は、例えばある種の風景の「死」とかかわる、そのような抜き差しならない特別の時間の別の謂なのだろうか。ここに書かれたものを、いま、プロットとしてなぞることはできる。そう、私は、いま、それを「なぞってしまっている」のかもしれない。「なぞってしまっている」とき、それは、まぎれもなく私の経験であるにもかかわらず、「側面図」として描かれた風景に墮してしまうのだろう。そして、そのようなとき、人はその風景の下層に横たわっている「瓦礫」を見ずにしまうのだろう。「正面図」を描いていたポジションから「側面図」を描いてしまうそれへのズレはなにに起因するのか。そのとき流れた時間と同質の時間に同じように触れること、そのような時間を同じように生きること、あるいはそうした生を生き直すことは不可能なことなのだろうか。

4) 横内プロジェクト、2000、『多文化共生コミュニティに向けて』p. 42-44

このエッセーを生むにあたっては、新原道信さんの大きな手助けを必要とした。最も深い絶望の淵で呻吟している私をその深さより数段深いところで受け止めていただいた。私の力量から十全とはなり得ていないけれども、思考することの本当の意味について教えていただいた

通っているキリスト教会が牧師不在になった時期、教会が間接的に運営に携わる保育園の園長を牧師が兼ねていたため、たまに週1回の説教を依頼されることがあった。それは、私が、「言葉」が身体の内側から出てこずに舌先でぐるぐる回る感覚にとらわれている時期だった。言葉はたくさん発せられるのに、自らは、なぜか「失語症」のようだと感じられてならない時期であった。そのようなある日、不思議なことに話の内容や枠組みは覚えているのに、それをどのように話したのか、自分の身体にかかわるリアリティー、輪郭のようなものが全く失われている瞬間があることに気がついた。脂汗をかきながら帰路につこうとしていたとき、保育士の方が、ある子が「あのおじさんと今日プールに行きたかった」と話していたことを伝えてくださった。さまざまな経緯から、その子が、自らの住み処に居場所を持ち得ない人であることをそれとはなく聞き知っていた。膝の力が抜けてその場にうずくまった。

なにかに触れられる瞬間の経験は、オリンピックの記録のように自動的に保持できるものではないようだ。それは、例えば「糞まみれ」の実践⁵⁾、あるいはある種の『投機＝投企的な「仕事」』⁶⁾の末に思いがけなく与えられることがあるような、そのようなものでもあるのかもしれない。

先の私の拙い「語り」に即していえば、そこになにか「風」（ヘブル語の *rwh*）のようなものが吹いていたのだとしたら、それは、時間の蓄積の中に刻まれた私のそして彼／彼女の「痛み」そのものが「語り」に関与しているかもしれないとしか、いまは言い得ない。

II. Das Unheimliche

「べらべらしゃべっているのに大切なものに触れられない」という強い感覚にとらわれ続けている。不安と焦燥感を緩和するためでもあったのであろうか、自らそのような状態を「失語症」と名付けた。同時にある風景が頭から離れない。キリスト者であることにもよるのであろう、それはイエス・キリストの「嵐を静める」というギリシャ語聖書の中の挿

5) 新原道信、2007、『境界領域への旅』大月書店、p. 273など

6) 酒井直樹、1997、『死産される日本語・日本人』新曜社、p. 80

話の中の「眠るイエス」という風景だ⁷⁾。

挿話に記載されている「海を静める神」という表象は、詩編77、89編などのようにヘブル語聖書に頻繁に出てくる表象であって、その意味ではユダヤ教、キリスト教を通じて特異なものではない。聖書学者による解釈も、通常「自然界すべての支配者」「奇跡行為者」「カオスの力を支配する権威」の業という文脈で語られる。しかし、私が見つかりついているキリストの「眠り」そのものへの言及はほとんどなされていない⁸⁾。一方で、文献学的には、この眠りの個所は伝承の核をなすものであるとされ⁹⁾、また、民間伝承がもとになっていた可能性も示唆されていることに気づいた¹⁰⁾。

通常は、静かな信仰に波風をたてるようなものとしては観念されないという意味で、一見なんの変哲もないこのささやかな風景に、私はなぜとらわれているのか。明確な答えはいまだに見いだせていないけれども（ああ、診断されたい！）、無意識との連関の可能性を示唆されて以降、フロイトの小さな作品にとらわれている。

フロイトは、「不気味なもの（Das Unheimliche）」という論文の中で、ドイツ語の“heimlich”（よそよそしくない、なじみの、飼い慣らされた、打ち解けてくつろげる）という語の分析を行いながらこの語が、「両価性（ambivalenz）に向けて意味を発展させてきた」結果、最終的に「その反意語である unheimlich と重なり合うまでになる」ことを明らかにした。そして、「意図せざる反復というこの契機のみが、さもなければどうということもないものを不気味にし、そうでなければ単に『偶然だ』と語ってすませるにすぎない場合に、宿命的なもの、免れたいものという想念を押しつけてくる」とした¹¹⁾。また、フロイトは、自身が

7) マタイ、マルコ、ルカの福音書は、共通のテキスト背景を持つことから共観福音書と呼ばれる。この挿話は、いずれの福音書にも記述がとどめられている

8) 内外の主要な注解書は目を通したが、いずれも「眠り」そのものについての深い言及はなされていない。例えば、川島貞夫、1991、「マルコによる福音書」『新共同訳新約聖書注解Ⅰ』日本基督教団出版局、p. 188など

9) R.ブルトマン、1987、『ブルトマン著作集2 共観福音書伝承史Ⅱ』新教出版社、p. 26

10) 荒井献、2005、『イエス・キリスト下』講談社学術文庫、p. 305

11) S.フロイト、2006、『フロイト全集17』岩波書店、p. 5-13、p. 31

分析した夢が持つ「多義性」は、決して夢にのみ固有のものではなく、民間伝承や言語慣例や迷信や習俗などにも広く見られることに言及している¹²⁾。

ところで、現代社会の中で私たちが直面する“unheimlich”なものは、フロイトが指摘するホフマンの小説『砂男』の主人公がとらわれて自死するに至る不気味な強迫観念や心理的な事象の中に閉じこめられるものではないのではないか。毎日のように報道される「テロ」行為、そしてテロを撲滅するという名で日々再生産される「テロ」、強迫観念のように「テロ対策の特別強化」のアラームが恒常的に電車の電子広告画面に躍る風景、毎日のように報道される動機のあいまいな殺人、年間3万人の自殺者が出るということ、野宿者の遺骨を宅配便で届けようとする行政職員、そして、例えば飛び込み自殺者をひいた電車のなかで起きる、ひとつの「死」が事故や事件／イベントとして実況中継の題材のように扱われてしまうような風景……。

04年5月○日午後5時30分ころ、山手線外回り、原宿駅の直前で電車は急停車した。車掌のアナウンス。「ただいま緊急停止の信号が発信されました……この電車にお客様が飛び込まれました。お客様の救出のためしばらく停車します。……」。このあと車内で起きた通話／会話／モノローグたら。

- A：「あのう○○だけど、いまさあ、乗ってる電車に人が飛び込んだみたい、すごいよ、その電車、うんうん、原宿の前。だからさあ、ちょっと会議遅れます。よろしくう、はいはい」
- B：「チョーむかつくんだけど！ 待ち合わせ遅れちゃうじゃん。どーしょー」
- C：「電話した方がいんじゃない？」
- B：「もしもし、ごめん、いまさ、原宿の前なんだけど、なんか、人が飛び込んだじゃったみたいで、そう、この電車。あり得ないんだけど……」
- D：「ったく、しょーがねーなー。なにやってんだか」
- E：「どうしたんでしょうねえ、たいへんですねえ」

12) S.フロイト、1991、『夢判断 下』新潮文庫、p. 52-53など

F : 「ほんとうにねえ、どうしたんでしょうねえ」

G : 「…… (舌打ち)」

生活世界のなかで“heimlich”なものとしてごくごく身近にある風景は、実に多くの“unheimlich”なものと同隣り合わせに私たちの眼前に横たわっている。いや、むしろ私たちの生活世界は、“unheimlich”なものを「そんなの関係ねー！」とし、それをそれとして自覚することすらできずに、それらを“heimlich”なものとして甘受してしまっている、私たち自身の感覚の麻痺そのものの不気味さによって構成されているのであろう。

キリストの「眠り」に私がとらえられたのは、その「眠り」がこの麻痺を、つまり人間が人間として持つべき感覚の麻痺、そう言ってよければ象徴的な昏睡状態のようなものを示唆しているように感じたからかもしれない。01年の新共同訳版では、ヘブル語聖書のイザヤ書51章9節の冒頭の予言者の詩と「奮い立て 奮い立て 力をまとえ、主の御腕よ。」となっていて、“awr”を「奮い立て」と訳しているが、これは神が沈黙から目覚めることを願う人間の願望として「目覚めよ」と訳することも可能だ。しかし、大事なのは、同じ“awr”が、対位法的に付置されている続く51章17節では、眠っているイスラエルの目覚めへと転換、逆転していることだ。さまざまな形で物語られてきた「神」の、「メシア」の「眠り」は、「神の沈黙」、「神の隠れ」という表象を通して、鏡像のように“diaspora”を生きる古代イスラエルの民の実存、つまり神殿という拠点の崩壊を眼にしながら、捕囚の民となり、あるいはさまざまな地に散っていかざるを得なかった深い不安に満たされた自らの「旅」の姿そのものを、照らし出してしまっていたのではないか¹³⁾。

現代の“diaspora”の旅は、例えば、自殺者をひいた電車のなかで繰り広げられる喧噪を形づくり、自らもそれに加担してしまっている自分の身体を見つめ直

13) F.T.バット、「眠っている神」『神学ダイジェスト』1991・夏季・70号、p. 98-100。「失語症」との関連でフロイトを顧みることと併せて、この論考の所在については金子啓一さんにご教示いただいた

す道行きのことであろう。そして、その「身体」とは、その車内にあって、到着時間の遅延を強いられたことへの反応として舌打ちをしてしまう、そのような身体であろう。ひとつの「死」そのものへのこのような無関心は、必ずやあの“mitmachen”（荷担）へとつらなるに違いないという、不気味な認識を呼び出さずにはいない。ここに至って、私は、この“diaspora”の「旅」が、「取り返しのつかないことをしてしまった」という深い内省の契機を持つという意味で、「喪の作業」への回路につらなるものと感覚できる。それは、自らの「昏睡状態」の自覚、自らの身体に刻まれた破れ・欠けとしての弱さの刻印を直視することと見えようか。

◆ Outro 詩のことば / “disphony”¹⁴⁾

職場のある川崎市の最南部に位置する桜本には、多くの人が訪れる。さまざまな人々はその街の風景を眼にし、「ガイド」が語る言葉に耳を傾ける。こちらは、その方々の感想などに耳を傾ける。「ここの子どもは元気で闊達だ」「このワイルドさは現代に失われつつあるものだと思う」「地域の実践が進んで人権にかかわるいろいろな取り組みが進んでいることを実感できる」……。

「取り組み」が「進んでいる」かどうかは、ここでは語らない。ツーリストに近い存在が眼にする風景が、「正面図」に触れ得るのかどうか、私は知らない。同時に、「この街に生きている」と宣言できる人間ですら、あるいはこの街で実践をしたことがある／していると宣言する人間も、その宣言だけで「正面図」を描け得ると保証できるのかどうか。

ある日、職場のこども文化センターで、利用時間（午後6時まで）を過ぎてもある理由から帰る場所を見いだせなかった子どもたちと、何度かの「帰りなさい」「いやだ」の押し問答の末に、週末の疲労感と終わらない事務作業による焦燥感とをからうじて抑えながら、偶然、「詩作りの遊び」を始めたことがある。下記の詩は、そのときに編まれたもので

14) E.グリッサン、2000、『全-世界論』みすず書房、p. 11

カリブ海のdiaspora詩人グリッサンは、クレオール化の中で発せられる言語を「多言語主義」の文脈で眼差されるsymphonyとし、それに対して、そのように整序されてしまうことのできない「最も内奥の我々の声」をdisphonyと名付けた

ある。頭の一文字に「あいうえお表」の文字を当て、自動記録風に頭に浮かぶ言葉を詩にしてゆく簡単な遊びだが、時間外に館で遊んでいるという「特別扱い」の心地よさのせいか、子どもたちは嬉々として詩をつくりはじめた。

ざいこうをかったあとに	なにかをして
じさつをして	にげて
ずるずると	ぬがされて
ぜいたくに天国で	ねかせて
あそんでいる	のどがかわいた
(Cによる詩 07.7)	(Aによる詩 07.7)

編集注：「ざいこう」は子どもが詩の中で作りだした言葉

けらけらと笑いながら彼女らが作ったこの詩／“disphony”が、フロイトの言う「夢内容」のようなものなのか、あるいは現実起きたことをよりストレートに表現しているものなのか、私はまだ知らない。しかし、この詩の行間には、夜になっても帰る場所／居場所が見いだせない彼女たちの「不安」や「叫びにならない叫び」、新しい「いま、ここ」での“diaspora”¹⁵⁾の不安の叫びが息づいて

15) 例えば、「ザイニチ」（金性済）と呼ばれる存在が、この言葉によって、新しい自画像を結ぶことができるかどうか。サイドが自画像として書き記した「働きかけ、また働きかけられ、誇り高く、優美で、悲惨で、滑稽で、不屈で、反語的で、偏執的で、防衛的で、独断的で、魅力的で、否応なしに注意を惹くもの」という表現を食いつぶさない在り方を通して……。自らを射抜くような「対位法的」な表現として……。例えば1948年の濟州島を命がけで脱出した彼／彼女たち、大島渚のドキュメンタリー『忘れられた皇軍』（1963）に記録された存在たちを想起することを通して……。対峙すべき大切な問いであると思う

はいないだろうか。これもまた、「快活」で、「粗野」で、「取り組みの進んでいる街」のひとつの風景だ。

施策、計画、あまたの「プロジェクト」の視線が見るものは、ある種の経験が「正面図」として描いたであろう風景の死（忘却）の上に成り立っているのではないか。しかし、ある種の「実践者」（自らは「糞まみれの実践」からはほど遠いところにながら「実践」を騙るような在り方とは、およそ対極に身を置くことのできる「実践者」）は、そのような「プロジェクト」になかば「荷担」しつつも、ときに「けらけら笑い」から対位法的に編まれたかのようなこのような「叫びにならない叫び」、新しい“diaspora”を生きる身体から放たれる「詩」に不意打ちをくらうのかもしれない。そして「いま、ここ」に解き放たれたあまたの過去の「叫び」の風景（「瓦礫」の風景）を同時に想起させるのかもしれない。

いわゆる「実践」の素人であり、かつ、神学、歴史学、精神分析の用語をどうしても誤読してしまうしかない素人が記述するものは、かくのごとく、「実践」からも「研究」からもズレてしまうしかなかった。

あまたの風景の死を見つめながら、「糞まみれの実践」を積み重ねてきた人びとの、はるか後方から、よろよろと、そして「アクロバティック」に歩みを続けてゆける私でありますように……。